

指導資料

 鹿児島県総合教育センター

生活 第15号

—小学校，特別支援学校対象—

平成26年4月発行

気づきの質を高める「伝え合い交流する活動」の工夫

学習指導要領解説生活科編では，気づきの質を高める活動として，「伝え合い交流する活動の充実」が示されている。

また，言葉などを中心としたコミュニケーション活動を通して，他者と情報交換することを目指した「生活と出来事の交流」が新たな内容として位置付けられたことから，「伝え合い交流する活動」が重視されていることが分かる。

そこで，本稿では，今，求められている生活科学学習における「伝え合い交流する活動」の工夫について，具体的な実践を例に述べる。

1 「伝え合い交流する活動」の意義

気づきの質を高めるとは，「無自覚なものから自覚された気づきへと高めること」，「一つ一つの気づきから関連付けられた気づきへと高めること」，「働きかけた対象への気づきから自分自身への気づきへと高めること」である。「伝え合い交流する活動」は，気づきの質を高めるという点から具体的に述べると，次のような意義がある。

(1) 新たな気づきの自覚

児童は，活動や体験して気付いたことを伝え合い交流する中で，友達の気づきと自分の気づきを比較し，類似点や相違

点から新たに気づきを得ることができる。

例えば，町探検後の伝え合い交流する場において，Aさんが「パン屋さんは，朝3時に起きてパンを焼いているよ。」と発表する。それを聞いていたBさんが，「魚屋さんも朝3時に起きて市場に行くと言ってたけど同じだ。お店の人は，早起きして仕事をしているんだな。」という関連付けられた新たな気づきを得ることになる。

(2) 活動や体験の質的な高まり

生活科では，気づきの質を高めるため，活動や体験を繰り返すが，単に繰り返すのではなく，児童がお互いの気づきを伝え合い交流する中で，活動や体験を質的に高めていくことが大切である。

例えば，町探検で，素敵な場所や不思議な物を見つけてきた後の伝え合い交流する場において，Cさんが「公園を掃除している人がいました。」と発表する。それをDさんが，「今度は，いろいろな人と会って，話をしてみたいな。」という思いから，地域の人と触れ合う町探検へと質的に高まる。新しく人との交流を対象に取り入れたことにより，新たに自覚された気づきを得ることになる。

(3) 自分の関わりへの自信

児童は、活動や体験したことを伝え合い交流する中で、自分の発表に共感してもらったり、友達から温かいメッセージやアドバイスをもらったりすることにより、自信をもつ。

例えば、地域の人に会ってきた町探検後の伝え合い交流する場において、Eさんが、「公園で小さい子の手を引いてブランコに乗せたら、喜んでくれました。」という発表をする。それに対して、「Eさんはお姉さんみたいですね。」という友達からの温かいメッセージをもらい、「私も人のお世話ができるぞ。」といった自分への気付きを得ることになる。

2 「伝え合い交流する活動」の留意点

「伝え合い交流する活動」をどのようにしていけばよいのか、その留意点について述べる。

(1) 多様な人との活動

「伝え合い交流する活動」は、まず、児童にとって一番身近な存在である友達を対象として始める。そこで、友達との活動を積み重ね、関わることの楽しさを十分に味わえるようにする。そして、徐々に異学年を対象にしたり、地域の高齢者や幼児を対象にしたりして、多様な人との活動へ広げ、経験を積み重ねていくことが大切である。

(2) 双方向の活動

「伝え合い交流する活動」は、人と人がつながることが大切であることから、「〇〇発表会」のような情報を一方的に

伝える活動ではなく、情報を双方向に行き来させられる活動にしていくことが求められている。そのためには、発表する側だけでなく、聞く側からメッセージやアドバイスの発信する場を仕組むなど、双方向の活動とすることが大切である。

(3) 感情の交流を図る活動

「伝え合い交流する活動」は、人の前で言語を使って話す活動だけでなく、非言語的な部分である表情やしぐさ、態度も重視される。

また、聞く側が発表する側をしっかりと見て、うなずきながら聞けば、発表する側は受け入れられている喜びを感じ、自信をもって話すことができる。発表する側が自信をもって話せば、聞く側も話に引き込まれてじっくり聞くことになる。このように、言語の交流だけでなく、感情の交流を図る活動が大切である。

(4) 多様な情報伝達手段を活用した活動

「伝え合い交流する活動」は、児童が知りたいことや調べてみたいことなどを、観察や質問などにより情報を収集する活動や体験が前提になる。そして、収集した情報を自分なりに理解・表現し、多様な人々へ情報発信していくことになる。

低学年児童は、言語を習得する過程にあることから、児童が伝えたいことを伝えるときは、話したり書いたりする言語による方法だけでなく、絵や身体による方法など多様な方法を活用した活動にする必要がある。

また、書画カメラなど ICT を活用して、伝え合うことも効果的である。

3 実践例

ここでは、単元「もっとまちの人となかよくなるう」（第2学年）の小単元「まちのひみつを教え合おう」を基に、「伝え合い交流する活動」の工夫について紹介する。

(1) 「多様な人との活動」にするための工夫

本時は、本番の発表会で地域の人を対象に行う「伝え合い交流する活動」に向け、事前にグループの友達を対象に行う「伝え合い交流する活動」をリハーサル

- (1) 目標
グループごとに交流し、「よく分かり、行きたくなった」、「もっと知りたい」ことについてのアドバイスを受けて、発表内容の見直しをすることができる。(活動や体験についての思考・表現)
- (2) 実際 [] 子どもの意識 ○ 教師の具体的な働きかけ ※ 評価

過程	主な学習活動	時間	教師の具体的な働きかけ、評価
出 会 う	<p>1 前時までの学習活動を振り返り、本時のめあてを確かめる。</p> <p>2 本時の活動を確かめる。</p> <p>はっぴょうを聞き合って、よく分かったこと、もっと知りたいことを教え合おう。</p> <p>ア グループで発表した内容が伝わり、行きたい気持ちになるか；ペアグループに聞いてもらう。</p> <p>イ 付箋紙にアドバイスを書いて渡す。</p> <p>ウ アドバイスを基に発表内容を見直す。</p> <p><子ども同士のアドバイスの観点> よく分かった(桃色の付箋紙) もっと知りたい(青色の付箋紙)</p>	(分) 7	<ul style="list-style-type: none"> ○ これまでの活動を想起できるように学習活動の経過を掲示する。 ○ 本時の学習課題を提示し、本時の学習活動を確認させる。 ○ ペアグループを確認させ、交流する場所が分かるように掲示する。 ○ アドバイスの観点(「よく分かった」、「もっと知りたい」)を提示する。 ○ 聞く側は、付箋紙に発表する側の発表態度についての記述はしないことを確認させる。
伝 え る ・ 深 め る	<p>3 グループに分かれて発表会のリハーサルを行う。【多様な表現方法による活動(写真2)】</p> <p><聞く側> 気付いたことを付箋紙に書き込む。</p> <p>【よく分かった】 【もっと知りたい】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ お花屋さんで売っているお花はどこから来るのか知りたい。 ・ 一番売れているお米は何が知りたい。 ・ 公民館には、どんな部屋があるのか知りたい。 ・ お店で働く人が一番嬉しいことを知りたい。 ・ お店は何時まで開いているか知りたい。 <p><発表する側> グループで振り返りをする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 練習どおりに発表ができた。 ・ 少し話すのが速くなってしまった。 ・ みんなが一生懸命聞いてくれて嬉しかった。 ・ 紙が見えにくかった。持ち方をかえよう。 	20	<ul style="list-style-type: none"> ○ リハーサルのやり方や各グループの持ち時間を知らせる。 ○ 聞く側は、観点ごとに記入できる付箋紙を用い、相手グループの発表を聞き終わったら、記入させる。 ○ 付箋紙に記入する時間を確保する。 ○ 付箋紙に書けなかったり、文章表現で困ったりしている子どもに個別に支援を行う。 ○ 発表したグループのよいところも桃色の付箋紙に書かせ、ペアグループのがんばりを称賛できるようにする。 ○ 発表する側は、相手グループが付箋紙に書いている時間に、発表の反省会を行う。 ○ 「相手に伝わったか」ということも話し合わせるようにする。 ※ みんなに分かりやすい発表になるように多様な工夫をして表現している。(掲示物・発言・身体表現)
広 げ る	<p>4 付箋紙に書かれたアドバイスを基に、発表会までに何をするかグループごとに話し合う。【付箋による活動(写真1)】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ もう一回聞きに行こう。 ・ 調べてあるから発表の中に入れよう。 ・ 模型を作ってみよう。 ・ お店の人の真似をしてみよう。 	8	<ul style="list-style-type: none"> ○ 「もっと知りたい」ことの付箋紙を中心に話し合わせる。 ○ 発表の改善点と改善方法をグループ全体で共有できるようにする。 ※ 相手グループからのアドバイスを受けて、発表内容の見直しを行っている。(付箋紙・発言)
振 り 返 る	<p>5 どんなアドバイスを受け、発表会までにどんなことをしておくかを発表し、本時の活動を振り返りながら次時の活動の見直しをもつ。</p>	10	<ul style="list-style-type: none"> ○ 学習のまとめとなるように、グループ内での話し合いを板書する。 ○ 話し合い活動を価値付け、次時までの見直しをもたせる。

【鹿児島市立草牟田小学校 中島尚枝教諭の実践から】

として位置付けた実践である。

このように、交流する対象を変えて、「伝え合い交流する活動」を繰り返して位置付けることは、「多様な人との活動」を可能にする。

そうすることにより、友達や地域の人など、多様な人の気付きと自分の気付きを比べることができ、「関連付けられた気付き」へ高めることができる。

(2) 「双方向の活動」, 「感情の交流を図る活動」にするための工夫

本時は、単に発表をするだけでなく、友達の発表を聞いて、「よく分かったこと」や「もっと知りたいこと」を付箋を活用して伝え合う活動を設定した実践である。



写真1 付箋を活用した交流

このように、「伝え合い交流する活動」において、聞く側が付箋などを活用して発表する側に情報を発信する活動を取り入れることは(写真1)、「双方向の活動」を可能にする。

また、聞く側が発表を真剣に聞いたり、付箋に温かいメッセージを伝えたりすることは、「感情の交流を図る活動」にもなる。

そうすることにより、「分かるようになった自分」や「できるようになった自分」など、「自分への気付き」へ高めることができるとともに、友達からのアドバイスを生かすことにより、次の「伝え

合い交流する活動」が充実していく。

(3) 「多様な情報伝達手段を活用した活動」にするための工夫

本時では、新聞やペープサートによる発表だけでなく、ニュース番組形式の発表(写真2)



写真2 ニュース番組形式の発表

や、小動物用の体重計を使って、実際にやって見せる発表など、多

様な表現方法を活用した実践である。

このように、「伝え合い交流する活動」に向けて、発表内容をまとめる段階で、教科書の表現方法を確認し、児童に選択・工夫させることは、「多様な情報伝達手段を活用した活動」を可能にする。

そうすることにより、自分の気付きと他者の多様な方法で表現された気付きと比べ、共通点や相違点から、より「自覚された気付き」へ高めることができる。

生活科の目標は、「自立への基礎を養う」ことであり、生活科において言語活動の充実を図り、言語能力の基礎を養うことは、この目標を具現化するものである。そのためにも、「伝え合い交流する活動」を工夫し、積極的に位置付けていきたい。

—参考文献—

- 文部科学省『小学校指導要領解説生活編』平成20年、日本文教出版
- 原田信之編著『気付きの質を高める生活科指導法』2011年、東洋館出版社

(企画課)